

対象学年・単位：1～2学年・各1単位

企画担当：SGH係

授業担当：クラス担任

学校data

1878年創立／普通科／生徒数965人(男子511人・女子454人)／進路状況(2014年度実績)大学218人・短大6人・専門学校5人・就職3人・その他122人★長野県21世紀型教育モデル校(2014年～)
★平成27年度SGH指定校

上田高校(長野・県立)

Report 06

グローバル課題の探究活動を導入
「大学受験のための進学校」から
脱皮を図る第一歩として

従来の進学校のやり方に
限界を感じて

上田高校は昨年度のSGHアソシエイトを経て、平成27年度のSGH指定校となった。これを機に、「総学」と2つの学校設定科目を連動させたグローバル課題探究プログラムを立ち上げた。

同校がグローバル教育に舵を切った背景には、伝統的な進学校としての危機感がある。学区内に新設された公立中高一貫校への生徒流出に対する方策が求められるなか、同校は従来のような生徒の意欲の引き出し方に限界を感じていた。「進学校は大学受験を掲げてただ勉強させればいい、という時代は終わった」と斉藤則章教頭。SGHを足掛かりに、学校改革を推進していこうとしている。内堀繁利校長はこう意欲を語る。「やらされる勉強ではなく、自ら課題をみつめて解決策を考える探究活動を通じて、社会を変革できるような人を育てたいと考えています」

長野県の特性を生かして
グローバル課題に取り組む

平均寿命の長さで知られる長野県に

ある同校は、SGHのテーマに「長寿県NAGANOから世界のいのち・健康を支えるグローバルリーダーの育成」を設定した。長野から世界へ健康長寿を発信することを目指した、いのち・健康に関するグローバル課題に取り組む探究活動を中心に、3年間のプログラムを構築。今年度の1学年から学年進行で展開していく予定だ(下図)。

「本校が目指しているのは全員参加型カリキュラムによるグローバルリーダーの育成」とSGH係の福井克実先生。1・2学年では、全員必修の学校設定科目「IR※1」(国際関係論)「GS※2I」「GSII」と「総学」を横断する連のプログラムを展開する。「IR」は「世界史A」「現代社会」をもとにした科目で、グローバル課題の背景となる基礎知識をインプット。その知識をベースとして、「GSI」「GSII」「総学」の時間を使って国内外フィールドワークや国際理解講座などの体験的な活動を行い、さまざまな課題研究に取り組む。そして3学年では、選択科目「GSIII」で希望者を対象にさらに発展的な取り組みを行うというのだ。



校長
内堀繁利先生



教頭
斉藤則章先生

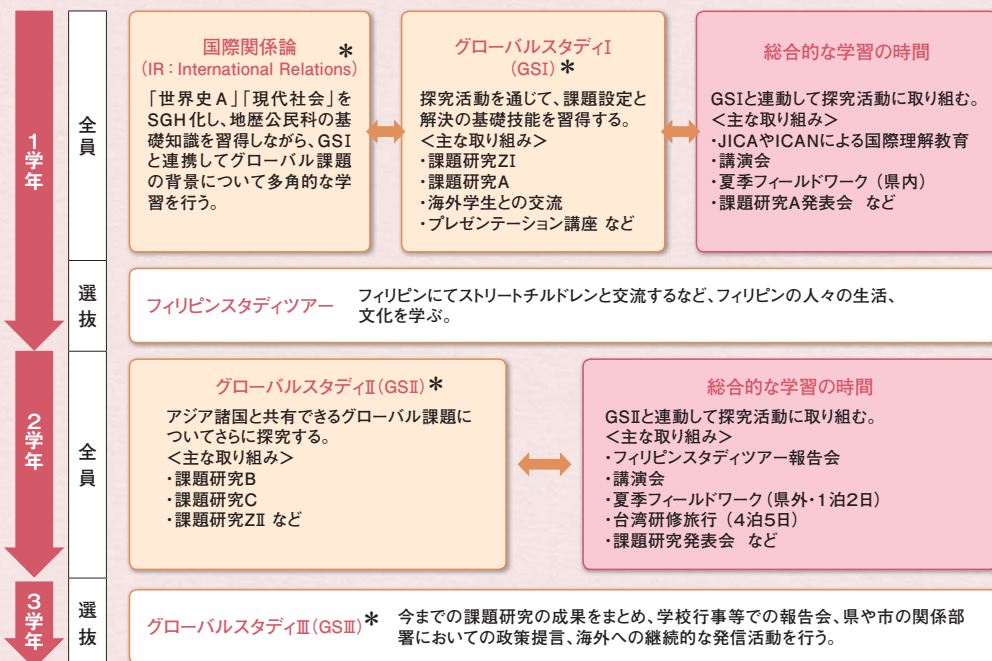


SGH係
福井克実先生

取材・文／藤崎雅子

上田高校の「総学」の位置づけ

いのち・健康とインターフェイスするグローバル課題の研究活動の流れ



*は学校設定科目

図1 SGHプログラムのカテゴリーと各フィールドワーク先

カテゴリー	コース	目的	1学年夏季フィールドワーク先(予定)
A 自然環境と地域文化	環境・防災	いのち・健康を、信州の自然環境と身近な災害を通じて考える	信州大学理学部の指導による野外巡検
	人権・ジェンダー・歴史・アート	いのち・健康を、信州の伝統文化と町づくりを通じて考える	清泉女学院大学人間学部、地獄谷野猿公苑
B 食の観点とビジネス展開	農業・資源・食品・栄養	いのち・健康を、信州の長寿を支える食と農業を通じて考える	信州大学農学部、寒天メーカー
	ビジネス・都市	いのち・健康を、地域活性化ビジネスを通じて考える	信州大学繊維学部、小布施町役場
C 地域社会と国際社会	平和・貧困・国際協力	いのち・健康を、国際協力和多文化共生を通じて考える	JICA駒ヶ根青年海外協力隊訓練所、長野県看護大学看護学部
	子ども・スポーツ	いのち・健康を、信州の健康を支える地域教育を通じて考える	青木村立青木小学校、長野県教委スポーツ課、長野県体育協会
D 地域医療システム	保健・医療	いのち・健康を、信州の長寿を支える保健活動を通じて考える	総合病院、製薬会社
	生命・情報・テクノロジー	いのち・健康を、信州の長寿を支える科学技術を通じて考える	信州大学繊維学部先進植物工場、筑波大学菅平高原実験センター

図2 2年間で取り組む課題研究

学年	課題研究	研究単位	内容
1学年	課題研究ZI	個人	夏季フィールドワーク(コース別)に関連した研究
	課題研究A	個人	グローバル課題を学びながら、日本、長野県のいのち・健康に関する強み弱みを再発見、探究する
2学年	課題研究B	グループ	台湾研修旅行の事前学習として日本文化について研究し、現地でプレゼンテーションを行う
	課題研究C	グループ	台湾・フィリピン等のアジア諸国の現状と課題について視野を広げ、日本がアジアと協働してこの課題に立ち向かうための探究活動を行う
	課題研究ZII	グループ	夏季フィールドワーク(コース別)に関連した研究

プログラムでは、「いのち・健康」を軸に「自然環境と地域文化」「食の観点とビジネス展開」など4カテゴリー・8コースを設定(図1)。それぞれの興味・関心に従ってカテゴリーを選び、課題研究やフ

大学や地域と連携し
フィールドワークを実施



↓5月、KIP知日派国際人育成プログラムで来日しているアメリカの大学生や留学生が来校。学校紹介プレゼンテーション、書道実演、グループトーク、上田城址公園案内を通じて交流した



↑「世界の現状を知ることで身近な地域の良さや課題に気づくことができる」(福井先生)との考えにより、プログラムの初期から世界に目を向けさせる活動を行う。写真は4月の「GSI」で、「エボラ出血熱」「マララ・ユサフザイさん」「イスラム国」など20の時事問題についてグループワークをする様子

フィールドワークに取り組む。進路選択につながっていくことも想定されるが、カテゴリーはあえて文理を融合させた。例えば「食の観点とビジネス展開」カテゴリーには「栄養」や「経済」など方向性の異なる生徒が混在することになる。このように多様な視点を入れることで、各カテゴリーの学びを深めるのがねらいだ。

新プログラムの浸透から
内発的な学校改革へ

新プログラムの実践において、いきなり全教員が足並みをそろえるのは難易度が高い。そこで同校は、従来と異なる手法が求められる活動は「GS」に集めた。

「今までは校内で同世代の中の活動が主でした。今後は、外部の方を招いたり、生徒を外に出したり、積極的に学校の枠を取り払っていききたい」(福井先生)

グループで議論を進めて課題解決能力を高めるトレーニングとして、全員必修の2年間のプログラムだけでも、生徒は5つの課題研究に取り組む(図2)。課題研究を行う上で必要となる討論やレポートなどの基礎的なスキルを磨くため、1学年は個人研究にも取り組むが、3〜6人が協同で取り組むグループ研究が多い。

いずれもそのプロセスにおいて、大学や国際機関、地域等との連携による夏季フィールドワークなどの体験的な活動や、生徒主導による発表会でのプレゼンテーションを実施する。さらには海外研修を通じて、研究成果をアジア諸国にも発信していく計画もある。

「GS」や「総学」の新しい授業をモデルとして、組織的に各教科の授業改善に取り組んでいく計画です(斉藤教頭)

One Point 効果を高める指導のコツ

課題研究では「テーマ設定」に重点

社会のさまざまな事象から各自の問題意識に従ってテーマを取り出す力を育むため、同校は課題研究のプロセスのなかでも、「テーマ設定」の部分重視している。そのため、国内外のフィールドワークやキャリアプランニングを通じてさまざまな刺激を与え、問題意識を高めていく。「テーマさえしっかり設定できれば、あとは生徒が自由に動き出す」と福井先生。

「GS」や「総学」の新しい授業をモデルとして、組織的に各教科の授業改善に取り組んでいく計画です(斉藤教頭)

そこから先、教員の共通理解を促していくのは、生徒かもしれない。昨年度、SGHアソシエイトとしてフィリピン研修に参加した生徒20人余りは、現地の高校生との意見交換などで多くの刺激を受け、驚くほどエネルギーシチュになって帰ってきた。そんな生徒の変容から、こういう活動こそ生徒に必要なのだと考える教員が増えてきたという。斉藤教頭は「SGHの取り組みは体制変革」ととらえる。

プログラムの趣旨をよく理解するSGH系の教員2人のチームティーチングにより、学年全員に均質化した「GS」の授業を行い、探究活動の土台を作る。その上で各クラスの担当が個性を生かして「総学」の授業を行う体制をとっている。

「GS」や「総学」の新しい授業をモデルとして、組織的に各教科の授業改善に取り組んでいく計画です(斉藤教頭)